

同窓生シリーズ ③③ 源氏物語との出会い



第15回生 秋山 慶氏

駒沢女子大学教授
府立六中を卒業後、第三高等学校を経て東京大学文学部国文学科に入学。卒業後大学院特別研究生。国士館短大・東洋大学に勤務。その後、東京大学に移る。定年退職後、東京女子大学を経て現在駒沢女子大学教授。

なぜ源氏物語などを研究することになったのかとよくたずねられる。いつかそういうことになっってしまったと答えるほかない。人は自分の進路をどのようにして決めるのだろうか。正直のところ私は主體的に自分の道を切り拓いたという誇りをもつことができない。

私は昭和十六年三月に府立六中を卒業したが、東京や近県に高等学校がいくつもあるのに、わざわざ京都の三高に進学したのは、なんとなくというほかない。しかし敢

えていえば、親のすねをかじっているくせに家族の一員であることから脱出したかったのである。東京を離れるとなれば京都しかなかったのだといえよう。

昭和十六年といえば、その年の十二月八日に米英相手の戦争が開始した。そして、二年後には文科系学徒の徴兵猶予停止(学徒動員)ということとなる。高校三年間の課程は二年半に短縮され、私は十八年十月に東京大学に進んだ。親の希望を無視して文学部を志

望したのは、いずれ兵役に服する身とあっては、それまでの間虚学に遊びたいという、ただそれだけの理由によるというほかない。国文学科の学生になったのは、やはり京都の二年半の生活が自然にそうさせたのだらうか。古都の社寺や風光に心を抱いたりするにはまったく自覚の乏しい十代の私だったし、戦局のしだいに緊迫してくる時代の波は学生生活にもきびしかったといえようけれど、しかし、もし三高に学ばなかったと仮定し

たら、私は別途の進路を歩むことになったに違いない。学徒動員の後の文学部に残っていた学生は、兵役に堪えない病弱者や私のような早生まれの未成年者のみ、従って授業はほとんど個人指導の観を呈していたが、しかし勤労動員や軍事教練のためこまぎれであった。

一年後、兵役に就き、敗戦後まもなく復学したもの、栃木県の疎開地から時間をかけての通学であったから、図書館や研究室を利用して勉強する余裕はなく、また、どんなにか貴重有益であったに違いない教授諸先生の講義も、なんと不遜なことか、ほとんど関心外であった。というのは、その頃の私にとっては、その本質が「ものあはれ」とされていた源氏物語を、なんぞして徹底的

に批判し排除しなければ私自身の新生はありえぬという、いま顧みればまったくひとりよがりのせつぱつまった境地を生きていたのだった。

敗戦後の論壇では、世界を敵にまわして惨敗した無謀な戦争への反省として科学的、合理的精神の欠如した精神主義がきびしく批判されていた。近代的な自我の確立による伝統的な主情性の克服の必要が説かれていた。私はそれまで歴史・社会の現実に対して自閉的に、ただなんとなき生きてきた自身への反省、というよりも憎悪に駆られていたとさえいえよう。

そのことが日本人の心性の全的な表現として伝統的に規範性をもちつづけてきた源氏物語への挑戦の姿勢を構えさせたのだといえよう。「季節的人間」という妙な題目の卒業論文は、源氏物語の世界の人たちが季節の循環のなかに埋没し、自然となれあいながら感じ考え行動する、没主体的な人生の様相を追及する作業の報告であり、そのことはとりもなおさず自身身を告発しようとするものでもあったが、じつはそうした作業の過程において、私は逆に源氏物語に取りひしがれてしまったのである。時代時代を超えて人々の心を捉え、その研究・享受の歴史のなかで価値づけられ、そして私たちに現前する源氏物語が、一介の青書生によってたやすく排斥されるはずはなかったのである。

あれから四〇年、あらゆる領域での変転は著しい。私の源氏物語との関わりかたも例外ではないようである。